



田んぼ2030プロジェクト 田んぼだより

第6号 2024年3月19日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニュースレター
発行:NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネット)水田部会
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:jimu@tambo10.org
ホームページ:http://www.ramnet-j.org



目次

- おむすび交流会 with 仙台育英 菊田 美緒 (仙台育英学園 外国語コース 2年)1~2
- 田んぼ2030プロジェクト 第5回ミニフォーラム 安藤 よしの (ラムサール・ネットワーク日本)3
- 東山の森の田んぼの一年 中島 稜太 (なごや東山の森づくりの会)3~4
- 水田部会からのお知らせ・2024年度 (2024年4月~2025年3月) の活動予定 / 編集後記4

* * * * *

おむすび交流会 with 仙台育英

報告 菊田 美緒 (仙台育英学園 外国語コース 2年)



はいポーズ シジウカラガン!

私たちは2022年からシジウカラガン復活プロジェクトに取り組み、シジウカラガンを多賀城市に呼び戻すために様々な活動を行っています。なぜ多賀城市にシジウカラガンを呼び戻すための活動をしているのかと疑問を持つ方もいると思います。それはかつて多賀城市がシジウカラガンの生息地だったからです。しかし、生息地の環境変化などに伴い、多賀城市からシジウカラガンは姿を消してしまいました。私たちが学ぶ校舎は多賀城市にあります。かつての生息地だった多賀城市にシジウカラガンを再び呼び戻すため、高校生の立場からできることを考え活動に取り組んでいます。

「おむすび交流会 with 仙台育英」は、私たちが考えたアイデアが実際に実現した催し物です。この企画を多賀城市で開催した理由は、シジウカラガンにゆかりのある土地だからというだけではありません。活動を進める中で、シジウカラガ

ンが暮らせる環境を作り、守り続けるためには地域の方々からの理解と協力が不可欠だという意見が多く挙がりました。今回の目的は地域の方々にシジウカラガンを知り興味を持ってもらうだけでなく、シジウカラガンが生息できるような環境づくりに協力したいと思ってもらえるように働きかけることでした。

当日の午前中は、私たちが制作した「シジウカラガン物語」紙芝居披露と、日本雁を保護する会の呉地会長による講話が行われました。また、メタバース技術とVRゴーグルを用いてシジウカラ



高校生による紙芝居のようす

ガンと一緒に飛ぶ体験をするなど、最新技術を用いながらシジウカラガンを身近に感じてもらいました。 昼食には、地域の方々が用意してくださった豚汁と多賀城市産のお米と七ヶ浜産の海苔を使ったおむすびが振る舞われました。 お米には、宮城県発祥の品種で粘りが少なくあっさりとした食感の「ササニシキ」と、粒が大きく香りや粘り、甘みに秀でている「いのちの舌に」にそれぞれ古代米をブレンドしたものが使われました。七ヶ浜産の海苔は香りが高く質が高いことで国内外から高い評価を受けています。海苔を巻く際にはただ巻くだけでなく、シジウカラガンの白く可愛らしい特徴的な頬を表現するために、おむすび全体ではなく、おむすびの中央部分を空けて巻きました。

「おむすび交流会with仙台育英」は、シジウカラガンを知ってもらうだけでなく、「地元の食材を使ったおむすびと一緒に食べる」という地域の方々と深い交流を図ることでシジ

ウカラガン復活プロジェクトという高校生の取り組みに、より興味を持ってもらえたのではないかと思います。

これからもシジウカラガンが多賀城市に再び戻ってきてくれることを心待ちにする人たちが増えるように、より一層活動に励んでいきたいと思っています。



シジウカラガン顔のおむすび



田んぼ2030プロジェクト 第5回ミニフォーラム

『生物多様性を向上させる農法—大規模調査の成果報告と農業の現場での生物多様性の向上を考える』
報告 安藤よしの (ラムネット)

田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト 第5回ミニフォーラム

生物多様性を向上させる農法—大規模調査の成果報告と、現場での生物多様性の向上を考える

プログラム

◎ 話題提供 18:35~19:20
片山直樹氏
「農地の生物多様性を向上させる農法に関する大規模野外調査の成果および中山間地域の農業のネイチャーポジティブについて」

◎ 質疑応答 / 意見交換 19:20~20:00
地域で生物多様性を向上させる農法を取り入れるためには

2023年12月15日(金)、農研機構農業環境変動研究センター生物多様性研究領域生物多様性変動ユニット主任研究員の片山直樹氏を講師に迎えて、オンラインで開催しました。田んぼ2030の登録者を中心に約50名の参加がありました。

第1部：片山氏 講演 「農地の生物多様性を向上させる農法に関する大規模野外調査の成果および中山間地域の農業のネイチャーポジティブについて」の概要

この大規模調査は、日本の生物多様性がどのように減少しているかを知り、農業に関する様々な取り組みを科学的に評価し、消費者の判断材料として提供することを目的に実施さ

れました。のべ1000カ所以上の圃場で植物、トンボ、水生昆虫、カエル、魚類、鳥類等の個体数も計測する大規模な調査を実施し、慣行・特別栽培・有機農業での比較を行いました。

農地は食糧生産の場であると同時に国土保全、水源涵養、景観形成、生物多様性保全など、様々な公益的な機能を有します。しかし、戦後の農業集約化で生産性は向上したものの、生物多様性は低下し続けてきました。農業の生物多

様性を守るためには環境保全型農業直接支払交付金制度があり、化学肥料・農薬を5割以上削減する特別栽培(特裁)や有機農業も推進されていますが、国際的な報告にはアジアの水田の有機栽培に関する研究事例は非常に少なく、主に欧米の畑作・果樹に関する事例が9割を占めています。

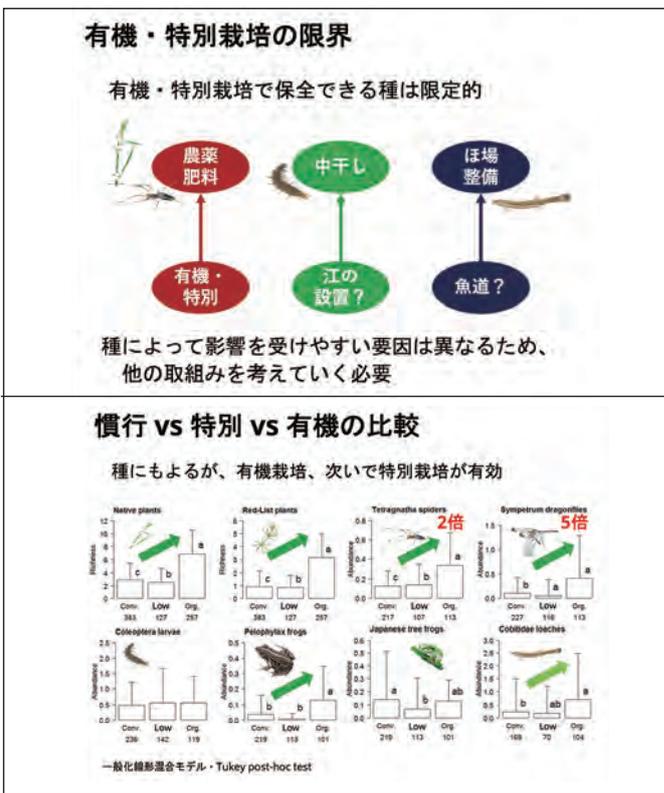
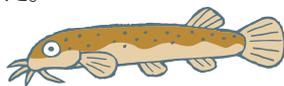
この研究の結果から、クモ・カエル・ドジョウなど多くの種で、有機・特裁・慣行農業の順に生息数が多いことがわかりました。また鳥類にとっては有機栽培の面的まとまりが重要であることもわかりました。しかし有機・特裁で保全できる種は限られており、冬季湛水、江・ビオトープの設置なども有効であることがレポートされています。今後の課題として、調査・評

価値体制の確立(定量的調査の開発・圃場のデジタル化など)・現在の生産性と生物多様性とのトレードオフの関係を、生態系サービスを強化するというシナジーに替えていく必要性などがあげられています。

第2部:質疑応答/意見交換

参加者からの質問と意見として

- ・農法の影響もあるが、水路などの圃場構造が生きものの生息に大きく影響していると考える
 - ・生物多様性保全のために、耕作放棄地を休耕田の状態に維持する事ができるのではないかと
 - ・地域、圃場によって生物も条件も多様であり、地域や場所ごとの知見を集め、各地域の農家で活かしてもらう仕組みが重要である
- など、多数の意見・質問が出されました。



東山の森の田んぼの一年

中島 稜太(なごや東山の森づくりの会)



田植えの様子

2月下旬、冬から春への移ろいを感じる今日この頃。森の散策路沿いにある3枚の田んぼでは、田起こしがおこなわれようとしています。名古屋に残された里山。ここでは、ヒトと自然との共生を次世代に伝える、里山の森づくり活動がおこなわれています。

森づくりをおこなっているのは、「特定非営利活動法人 なごや東山の森づくりの会」です。森づくりの会では、様々な班活動がおこなわれていますが、そのひとつに田んぼ班があります。

この原稿の執筆時、生きものが春を告げる啓蟄が間近となっています。田んぼの周囲では、植物が芽吹き、水辺ではアカガエルの孵化が始まっており、生命活動のクラウチングスタートの火蓋が切られ始めたようです。春を喜ぶのは、ヒトも例外にみならず、時々訪れるうらかな日とに、東山の森の散策者が増えました。

田んぼでは、化学肥料と農薬を使わずにもち米の稲が育

てられます。5月、水入れがなされた田んぼでの代掻きは、子どもから大人までが泥んこになって足踏みし田を掻き混ぜ、レーキや鍬で田を掻き均します。代掻き後にツバメが泥をついばみに来る光景は、ささやかな楽しみでもあります。

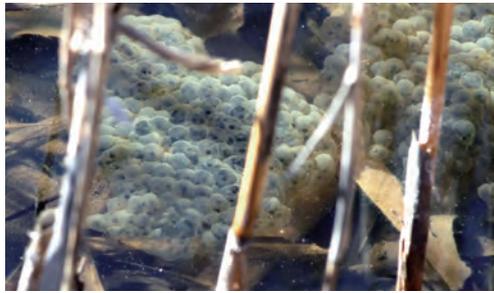
田植えをする頃から夏にかけて、カイエビやホウネンエビ、イチョウウキゴケやトリゲモ、ヒメタイコウチ等々、田んぼは生きものの宝庫となります。生物多様性という小難しい言葉の意味を知らずとも、見て触れて、時には食べて、場所や季節で移ろい代わる生きものたちによって、生きもの多様性を体験する事ができます。

秋になり、たわわに実った稲をザクリザクリと刈り取ると、成長の重みが身に沁みます。刈りとり干された稲は、電動の脱穀機と唐箕、足踏み脱穀機と千歯こき、手回し唐箕の総出で脱穀します。粃が袋詰めされると、万感の思いが身に沁み渡ります。

冬になり、待ちに待った餅つきは、田んぼ講座の参加者や



稲刈りの様子



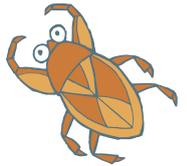
アカガエルの卵塊

森づくりの会全体では田んぼ班含め、地域の住民の方々に身近な自然体験を目的とした様々な体験講座もあり、市民・NPO・企業・行政の協働による森づくりがおこなわれています。名古屋

他の班の方々も併せておこないます。「餅を食べるための田んぼ活動であった!」と言ったとて、この時ばかりは過言ではないです。この他、播種、苗床作り、草取り、観察会、注連縄作り等々、一年を通して活動がおこなわれています。これから約一年、廻り廻る田んぼの始まりです。

へお越しの方は、東山動物園を含む約400haの東山の森へ、是非遊びに来てください。

特定非営利活動法人なごや東山の森づくりの会
<https://higashiyama-mori.sakura.ne.jp/>



〈水田部会からのお知らせ〉

●田んぼ2030プロジェクトに参加されているNPOバランス21の活動地「堂谷津の里」が、環境省の自然共生サイトに認定されました(環境省 2月27日報道発表)。お祝いするとともに、さらなる活動を祈念しております。

★★★★★ 2024年度の活動予定(一部) ★★★★★

●2024年5月上旬に、初めて台湾の水田と関連機関を訪問します。その目的は、水田の生物多様性の向上や、水鳥と水田農業との共生をめざす先駆的取り組み及び、棚田を含む台湾の水田景観の視察と意見交換です。具体的には、既に交流を行っている、花蓮区農業改良場、レンカク生態教育園と、その管理水田などを訪れ、花蓮では講演も行います。

●田んぼ2030プロジェクト参加者による活動実績の報告会を10月頃開催予定です。

●田んぼ2030ミニフォーラム(オンライン)

2022年度より、計6回開催。毎回50~80名の参加があり、活発な意見交換が行われました。

次回の第7回ミニフォーラムは7月頃開催の予定、以後順次第8回・第9回と開催していきます。

●田んぼ2030だより

2024年度は第7号を8月に発行、年度内に計3回の発行を予定しています。

ご意見や活動レポート等は 田んぼ事務局メールアドレス jimu@tambo10.org までお送りください。

【編集後記】

元旦に起きたまさかの大地震と津波で被害にあわれたたくさんの方々にお見舞いを申し上げます。世界農業遺産にも登録されている能登地域の持続可能な暮らしが一瞬でずたずたにされてしまう現実を見せつけられました。2011年にスタートする予定だった旧田んぼ10年プロジェクトがようやく発足できたのは2013年、東日本大震災(2011年3月)後、2年を待たなくてはなりません。被害の大きかった東北の田んぼのみなさんは復興に努め、現在も生物多様性保全型農業に取り組んでおられます。私たちも微力ながら復興のお手伝いができるような活動を考えていかなばと思います。 安藤 よしの

※田んぼだよりへのご意見、活動情報等をラムサール・ネットワーク日本事務局までお寄せください。

また、田んぼだよりをPDFファイルでのみ受け取りたいという方は、その旨事務局までお知らせくださるようお願いいたします。



田んぼ2030プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
このニュースレターは、2023年度地球環境基金の助成を受けて作成しました。

